

## 小説同人誌評 28

### ひとりの 命の記憶

細見和之

新型コロナウィルス禍から次第に生活は平常化しつつあるが、ヨーロッパではふたたび復活しそうな勢いである。私が研究としてやってきたことでいえば、「啓蒙の弁証法」そのものである。これだけ自然支配を完遂してきた人類とはいえ、ウィルスという極小の自然を制御できないのだ。未知のウィルスは野生の動物から来るのが一般的で、未開状態の自然に人間が分け入ったことからたらされるという。しかも、人間の移動がすばやくグローバルになされているがゆえに、ウィルスもそれだけ速く遠く拡散してゆく。

ただし、ウィルスはなにも悪の権化というわけではなく、たとえば人間をふくめて出産の際に胎盤を形成する動物は、胎盤形成のため遺伝子配合をじつは太古にウィルスを介して獲得したようだ。遺伝子の突然変異はいわゆる複写ミスだけではなく、ウィルスをつうじて生じていたことになる。その意味で

も人類とウィルスは共存するしかないのだと思える。

さて、今回はさすがにこのウィルス禍を作品に組み込んだものが何篇か見られた。その代表は、『VIKING』第83号掲載の、宇江敏勝「牛車（うしぐるま）とスペイン風邪」。舞台は作者の作品の多くがそうであるように、和歌山県田辺市の奥深い山中。時代は大正七年の十一月下旬。二十歳の塚田喜三次（きさじ）が、他の三人の男とともに、棲俵を載せた牛車を曳いてゆく。目的地は田辺に向かう途中の栗栖川という在所で、そこで一泊して積荷を米、味噌、醤油などと交換して、また引き返すのだ。

山道を牛車がゆっくり進むあいだ、行く先々でスペイン風邪の噂が飛び交う。都会で流行しはじめたその危険な風邪はすでに山深い村まで脅かし、寺の住職の跡継ぎに目されている若い和尚も感染して重篤に陥っているという。喜三次はまた、一年前に結核で亡くなった榎本康代のことを繰り返し思い起こす。康代は一带の大地主の娘だが、彼の小学校の同級生でもあったのだ。亡くなる数日まえ、喜三次は康代の父親から呼ばれて康代と言葉を交わしてもいた…。

作者が今回のコロナウィルス禍に触発されてスペイン風邪の記憶を掘り起こそうとしたことは明らかだろう。今回のウィルス禍では

死者の数がしきりに語られているが、ひとりひとりの死がそこには希薄な印象を拭えない死が希薄だということは、とりもなおさず、私たちの生そのものが希薄だということにはかならない。

続く『VIKING』第83号には、同じく宇江敏勝「狸の腹鼓」が掲載されている。四百字詰め換算百六十枚の一章掲載ということ、この号では作品はこれ一篇が誌面を占めている。こちらの舞台もほぼ同じだが、時代は作者自身の生きてきたものと重なる。

冒頭は現在時で、「わたし」（藤江隆和）は、六十年前に自分が炭を焼いていた山奥を訪ね、そのときに出会った森村季美子という当時高校三年だった娘のことを思い起こすのである。こちらの筋の紹介は略すが、以下の二点は見落とすことができない。すなわち、作者が生きた一九五〇年代から六〇年代にかけての世界がひとりの少女の記憶とともに丹念に描かれていること、作品の後半が作者には珍しい海洋小説となっていること、である。

途中、大逆事件の話題も登場する。作者の描く紀州は大逆事件で処刑されたひとびとのゆかりの地でもあって、それにかかわる作品世界もありうるのだと思わされた。ますますの健筆を折りたい。

ひとりの人間のかげがえのない記憶を描くという点では、『組香』第5号掲載の、新谷翔

「湯けむりの街」がまさしくそうだ。冒頭と末尾で「ぼく」(颯太)が十五年ぶりに別府を訪れる現在時を取るという作品の構成も、奇しくも宇江の「狸の腹鼓」と同じである。しかし、ここに描かれている男女の姿はきわめて対照的である。

「ぼく」は大学一年のとき、別府で旅館のバイトで知り合った優子から清美を紹介される。出会った宴会の夜、すっかり酔っ払った清美をワンルームマンションに送ったことから「ぼく」と清美は恋人関係のようになり、半同棲生活を送ることになる。しかし、清美の精神状態は不安定で、マリファナを吸ったり、手首を切って自殺未遂を起こしたりする。背景には、清美の母の死があるようだ。清美が高校三年のとき、遊びまわっていて深夜男のバイクに乗っていた事故を起こした際、病院に駆けつけようとした母の車も事故を起こし、母は死んでしまったのだ。そのトラウマを癒やそうと、優子は「ぼく」を清美に出会わせたのだ。清美は自殺未遂のあととも太腿を切る自傷を繰り返し、最後は踏み切りで飛び込み自殺をしてしまう…。

宇江の作品で「わたし」と森村が手紙を何度交換しても文字どおり手も握らないような関係に終始するのに対して、こちらでは「ぼく」と清美は、ときには泥湯で泥まみれになりながら、繰り返しセックスする。しかし、

もう一步のところまで相手の内面にまで踏み込めないという点では共通している。

力作だが、優子と「ぼく」の関係をどう描くか、またタイトルにも一考が必要ではないかと思われる。

一方、『姫路文学』第134号掲載の、中島妙子「風のエピタフ」は、七十二歳で亡くなった「美也子さん」の生涯を淡々と描いている。中国山脈のなかの小きな村で、まさしく鄙には稀な美人として育った美也子さんは、九歳で父を亡くす。遺骨も届かない戦死だった。高校二年のときには、自転車で自宅に帰る途中、待ち伏せていた男に襲われ、危うく難を逃れる。相手は顔を帽子とマスクで隠している分からないが、その後退学した同じクラスの男子生徒だったようだ。さらに十六歳の弟がオートバイの無免許運転で事故死してしまふ。美也子さんは京都の女子大の家政科を出て、彼女の故郷の村のさらに奥の中学校の家庭科と音楽の先生となる。

隣町の中学校に転動したとき、水上修司という若い理科教師も転動してきた。美也子さんは水上に誘われて、姫路、神戸、大阪などへ映画を観に出かけるようになる。京都まで足を伸ばしたとき、日帰りが不可能となって二人は梅田で一泊する。やがて二人は結婚の約束を交わすが、その翌年の冬の朝、オートバイで通動していた水上がトラックと衝突し

て即死してしまう…。

美也子さんが亡くなったとき、布団のうえに「白無垢の打ち掛け」が掛かっっていて、手に握っていた巾着袋にはダイヤ入りのプラチナの指輪が三つ入っていた。その謎解きのような形で作品は綴られてもいる。

『AMAZON』第502号掲載の、蛭川崇「蛇の道」も、コロナウイルス禍が絡んでいる。学生時代からの知り合いの釘宮から、あるとき西崎は、西崎の所有している高知県の山小屋に行ってみたいと持ちかけられる。釘宮は商社を退職したあと北欧料理を出す店を経営していたが、コロナウイルス禍で客足が遠のくのみならず、店を閉けようとする窓ガラスを割られるなど、いやがらせを受け、あげくのはては釘宮自身がウイルスに感染してしまい、店をたたむことになっていた。西崎は釘宮の気分転換のためにも、遠い山小屋を一緒に訪れることにする。

しかし、山小屋での夜、釘宮は西崎に性交を求めてくる。人里離れた山小屋という状況のなかで、西崎は釘宮の「ただの遊び」という言葉にも促されて、釘宮の肛門に射精してしまう。翌朝、「ただの遊び」という言葉をめぐって釘宮はひどいショックを受け、二人で乗ってきたレンタカーでどこかへ行ってしまう。食べ物もない状態でひとり取り残された西崎は山越えの近道で街へ出ようとして山中

深くに迷い込んでゆく…。

この作品ではコロナ禍は釘宮が店を開める背景となっているだけのようにも思えるが、西崎が山中で出くわす幻のような五メートルもの大蛇は、コロナ禍のなかで解き放たれたひとびとの悪意の象徴のようにも読むことができそうだ。コロナよりも怖ろしい人間の悪意の象徴である。

『てくる』第27号掲載の、安海泰「ドライアイス」は、息子から見て分からない父親の謎の部分を描いている。

「私」の出動前に、入院中の父親が昏睡状態に陥ったという連絡が入る。市の文化センターに勤めている「私」はその日の文化イベントの引継ぎを済ませ、イベントに必要なドライアイスを購入したあと病院に向かう。臨終にはなんとか間に合ったが、「私」は父の死を冷淡にしか受けとめられない。子どもどものきには父との濃密な関係があったが、いつしか心の交流は途絶えていたのだ。

しかし「私」は伯父（父の兄）から思わぬ父の姿を教えられる。戦争中、空襲のなかひとり生き延びてかえってスパイ扱いされたこと、元来は歴史学の研究をしたかったのに、兵役免除のために親から無理矢理工学系に進まされたこと、「私」が大学で工学系の大学を中退して歴史学を勉強しなおしたことを喜んでいたこと…。

私自身父を亡くして、同じような体験をしただけに、考えさせられることの多い作品だ。

同誌掲載の、南奈乃「スウィートホーム・ブルース」は、夫婦と仕事をめぐる関係に、住居の選択という問題が絡んだ作品。

不動産会社の車に先導されて、二歳になる娘絵里奈とともに「私」が夫の車で新居の下見に出かえるところから物語ははじまる。交通の便のわるい借家の古民家だったが、駅に近い現在のマンションには住み続けられない事情があった。「私」のお腹にはすでに二番目の子どもが宿っていて、それまで共働きだったのをとうとう「私」は退職せざるをえなくなつて、安い家賃の広い住居が必要なのだ。

夫のほうは乗り気で、ひとり新居に引っ越してどんどん手製のリフォームをくわえてゆく。実家の近くで次女を出産した「私」は、新居での生活を始めるが、向かいの大家との関係が微妙である。そこには絵里奈より一つ年上の女の子アキがいて、遊び相手になってくれそうなのだが、母親は早朝から出かける仕事をしていた、アキの面倒は姑が見ている。その大家の家で遊んでいるとき、絵里奈が鎖骨を折る大怪我をする…。

夫と大家という関係のなかだけでは先が見えない状況のなか、「私」は寺の一角で私設の絵本図書館を開いている女性と出会う。地域の助け合いのなかにかろうじて救いが見出さ

れる形になつている。

『moon』第16号掲載の、高坂正澄「穴」は、不思議な作品世界。

五十七歳の「わたくし」が自分の生涯を語る形式になつているのだが、中心に置かれているのは、二十六年前行方不明になつた妻、光子との関係である。ネジを造る工場を父親から引き継いだ「わたくし」は、二十九歳のときに六歳年下の光子と見合いし、一年ほどで結婚したのだが、ある朝、光子は「あたし、今日は観音さんに行つてきます」と出かけたなり、帰つてこなくなる。あとで、光子が妊娠していたらしいことに「わたくし」はようやく気づく。

何年も光子の行方の手がかりが掴めないうちに、「わたくし」は廃村に興味を持つようになり、バイクにまたがって廃村めぐりをするようになる。最後に行き着いた廃村のほら穴に入ったとき、「わたくし」は「戻りなさい」という女性の声を耳にする。その声は、ほら穴の断層の先にはもう一つの世界があつて、二つの世界が一つになるとよくないことが起こると言う。「わたくし」はそちらの世界こそ光子が存在しているという予感に突き動かされ、ほら穴のその先に向かおうとする…。

一種、多元宇宙論のような世界だが、この作品で繰り返される「断層」へのこだわりは、震災で亡くなって遺体すら発見されないひと

びとは、その断層のさきのもう一つの世界でそのまま平安に暮らしているという、祈りのような思いがこめられているのだと思う。

『黄色い潜水艦』第72号では、木下衣代「ムロタニさんのこと」が、これまた不思議な世界を醸し出している。

この作品は「岡田さん」、「高梨さん」、「谷口さん」、「佐々木さん」とタイトルを付された連作となっている。佐々木を除いて、天竜鍼灸院の客である。それぞれその鍼灸院の佐々木というマッサージ師の世話になっているのだが、その佐々木は客に、もつと具合をよくするために「ムロタニさん」のところを訪れなさいと、稚拙な地図を描いて渡す。渡された客は不信を持ちながらも、なにかのついでにそこを訪れることになる。

佐々木の教える「ムロタニさん」の場所は、正規の仕事場、娘の開いているカフェの奥の間、最後は自宅と異なっている。そこで初老の女性「ムロタニさん」が客を迎え、自分で「見えるもの」を客に伝える。岡田には蛇が憑いていると言い、高科には敏だらけ、谷口には影がない、と彼女は語る。

最初は意味不明に思われる「ムロタニさん」の言葉がだんだんと客が抱えている問題の本質を突いているように思われてくる。マッサージで体をほぐすだけではどうしようもない、それぞれの客が抱えている、心の強張り、魂

の強張りのようなものが見えてくるのだ。

同誌掲載の、天見三郎「やじきた食堂」は、昔ながらの食堂のゆたかさを伝える好短篇だが、ここにもコロナウイルス禍が組み込まれている。

六十三歳で小さな翻訳会社に勤めている「私」は、糖尿病を抱えていて、その運動療法のために休日にはサイクリングをしている。その途中「やじきた」という名の食堂を見つめる。おかずをガラス棚に並べた昔ながらの大衆食堂。ぶつきらぼうな女将ひとりが接客をしている。「私」はそこがすっかり気に入って、毎週のように通うようになる。やがては厨房で料理を作っている大将とも親しく言葉交わすようになる。山登りが趣味の大将から、溪流釣りに誘われたりもする。

台風が続いて、「私」は食堂にしばらく行けない状態になる。久しぶりに食堂を訪れると、女将さんひとりで、大将は半年前に溪流釣りをしている、足を滑らせるなどして亡くなったことを知らされる。「私」を誘ってくれた一週間後のことだった。女将はいったん店を閉めていたが、ひとりでなんとか店を再開させたのだった。しかし、そこにさらに新型コロナウイルスが追い討ちをかける……。大手のチェーン店はともかく、個人経営の食堂はことごとくこういう事態に見舞われているに違いない。ガラス棚に並んでいるおか

ずと値段を書いただけの箇所などでさえ印象深い。それがいま私たちのもとから確実に消えつつあるのだ。

『雑記囃子』第25号では、谷口俊哉「ラストシーン」は終わらない」を痛快なエンターテインメントとして読んだ。

伊万莉は当代随一と評される演技派女優だが、スキヤングルが絶えない。その彼女が最後の巨匠」と呼ばれる八藤監督のメガホンのもと、「サンサーラー再会」という輪廻転生の物語に主演して撮影が続いていた。伊万莉と監督はしばしば衝突し、ラストシーンにいたって撮影は延期になってしまう。おまけに監督はその夜、心臓発作で急逝してしまう。

そのときから伊万莉には、死んだ監督の声が聞こえるようになる。伊万莉自身、ラストシーンには不満で、監督の声と交信しつつ、彼女は納得のゆくラストシーンを撮影しようとする。とはいえ、会社に撮影続行の意志はなく、スタッフも解散してしまう。伊万莉は、かつて八藤のもとでフィルムの編集をしていた「高ジイ」を手始めに、ファンの若い男に助けられて、すでに現役を退いている八藤監督の往年のスタッフを集めてゆく。いまは老人施設に入っっていて、認知症を発していると思われる元名カメラマンの鬼塚も、カメラを持つと俄然、感覚を取り戻したりする……。

伊万莉の女優としての気概とともに、映画

が職人たちの手作りだった時代感覚がよく描かれてるのに感心した。

『仙台文学』第96号掲載の、由布木秀「輝きの中で」は、主人公が何度か滞在するインドと帰国後の日本の光景を交互に描いて、大きな作品世界を予感させる。

冒頭、若い大学生（医学生）のシゲルがインドの役所でビザの延長申請をしている。チップを渡せばすぐに書類を受け取れるのは分かっているのだが、彼にはそうするつもりはない。最後は激高したかのように、大声で叫び、机を叩き、ようやく二日がかりで彼は証明書を手に入れる。

そういう自分なりに筋をとおした生き方を貫きたいシゲルは、インドの町で物乞いをしたり、大道芸をしたりして、その日その日を懸命に生きているひとびとの姿に接する。とくに障害を負った大道芸人から、彼は日本とある駅で出会った、彼が「オカッパ」と呼んでいる、脳性マヒの女性を思い出す。彼女は駅の構内で自分の詩集を売っていて、シゲルはそれを購入して、感想を彼女に述べたりしたことがあったのだ。

日本でシゲルは、教会の歳末助け合い運動で募金をしている見知らぬ女性と出会う。募金に応じた際に相手が「ご協力、有難うございます」と言ったとき、シゲルは「何が有り難いの」と執拗に食い下がる。そのときシゲ

ルを突き動かしている衝動にはなかなか言葉にならないものがあるのだが、それがインドでの体験から来ていることは疑いない。その後、シゲルは詩集を売っていた脳性マヒの女性を探すが、すでに駅の構内から物売りは一掃されていて、柱にはビラ一枚貼られていない。

時代は明示されていないが、「オカッパ」がシゲルを「セクトの人間」と間違えるところなので、やはり一九七〇年代初頭だろうか。その「オカッパ」の姿とともに、克明に描かれているインドの大道芸人が印象的だ。エピソードを並べる形になっているが、シゲルの生きてきた背景が丹念に描かれるなら、大きな作品へと結実しそうだ。

同誌掲載の、牛島富美二「症（しるし）の再会」は、よくまとまった短編。

主人公の大内は、不意に左耳に痒みをおほえる。しばらく痒みに耐えていたが、夢で左耳がこっそり落ちるのを目にして、総合病院の皮膚科を受診する。診察を受けているあいだに隣も同様に赤く爛れていることに気づく。

会計と投薬の指示を待つあいだに、大内は真紀の姿を目にする。真紀は、大内の元妻である日、突然、ひとり息子の幸樹を連れて大内のもとを去っていったのだ。その真紀がいまおなじ病院で診察を待っている。真紀のほうが促す形で、二人は病院を出る。大内

の車に向かう途中、大内は思わぬことに、息子の幸樹が波に吞まれて二年前に亡くなったと伝えられる。それも原因のひとつで、新しい男とも別れることになったと…。

真紀が病院に来ていたのもおそらく、自分と同じカンジタという病原菌のせいだと大内は推測する。別れた二人をその病原菌が何年もの歳月を隔てて結びつけていたことになる。全体に、幸樹の扱いがやや軽い印象になるが、とくに冒頭の丁寧で緻密な文体に惹かれた。

『滋賀作家』第142号では、巻頭掲載の川田啓治「手紙」がよく工夫された構成の短篇となっている。中学校三年の中村茂雄は秋の文化祭で劇をしたいと思っている。剣道部の先輩、池本に、彼はその劇をつうじて分かってもらいたいことがあるのだ。しかし、同じ組で中村にライバル心を燃やしているバスケットボール部の田中洋介が中村の提案に執拗に反対を繰り返す…。

活発なクラス討論の模様、中村が池本に宛てた手紙（とその分析）など、さまざまな工夫が凝らされている。

『たまゆら』第118号では、杉本増生「天王寺公園から」が端正な文章で味わい深い。「黄金風景」と「蘇芳」の二篇からなっているが、前者では、大学紛争の時代に、天王寺公園で「アイソソフト」を売っていた母と子の姿がまさしく「黄金風景」として描かれている。